

## 論文内容要旨

しめい 氏名	こくぶん なおこ 國分 直子
学位論文題名	Residence-related factors and psychological distress among evacuees after the Fukushima Daiichi nuclear power plant accident: a cross-sectional study (福島第一原子力発電所事故における福島県避難住民の居住関連要因と心理的ストレス反応の関連)
<p>福島県の避難住民は、東日本大震災とこれに伴う東京電力福島第一原子力発電所（以下、原発）の事故により長期の避難生活を余儀なくされている。多くの福島県の避難住民は、自身の健康に不安を感じ、避難に起因する精神的な問題が報告されている。先行研究では、長年にわたり生活していた自宅から、気候や生活文化が異なる地域での避難生活は、精神健康に影響を及ぼすことが報告されている。そこで、本研究は仮設住宅に居住する住民を対象に、居住関連要因（転居回数・居住不満足感、恒久的住宅への見通し）と心理的ストレス反応の関連を明らかにすることを目的とした。また、性・年齢における違いについて、層別解析を実施した。</p> <p>原発事故により避難指定区域等に指定された2市町の仮設住宅に暮らす住民922人を対象とし、そのうち525人（56.9%）が面接調査に参加した。心理的ストレス反応は、K6（全般的な精神健康状態の尺度）を使用し、5点以上の者を心理的ストレス反応相当とした。</p> <p>ロジスティック回帰分析（多変量解析）の結果、頻回な転居（OR = 2.05、95%CI : 1.14–3.66）と居住不満足感（OR = 2.48、95%CI : 1.60–3.83）が心理的ストレス反応と有意に関連した。また、性別による層別解析の結果、女性において、恒久的住宅への転居予定（あり）と心理的ストレス反応が有意に関連した（OR = 1.93、95%CI : 1.03–3.63）。</p> <p>避難にともなう転居は避難者の精神健康リスクを増大させると報告されており、本研究でも同様の結果となった。震災後の同居人数が震災前より有意に減少しており、頻回な転居を繰り返すことで、家族の分離や地域住民とのつながりが希薄化し、心理的ストレス反応が高まったと考えられる。また、居住不満足感は心理的ストレス反応と関連がみられ、先行研究と同様の結果であった。対象者の9割が震災前、持家に暮らしており、仮設住宅という狭い居住空間は、隣人の会話や日常生活の騒音等、ストレスを感じやすい状況であったと考えられる。避難者の居住不満足感を評価することは、心理的ストレス反応の予測因子になりうることを示唆された。さらに、恒久的住宅への見通しは、故郷への帰還の不確実性が避難者に影響を与えている可能性があり、これは原発事故の避難者の特性であると言える。特に女性において、恒久的住宅への見通しがある者は、将来に対する希望というより、新たな転居というストレス要因になっていた可能性が考えられる。上記より、災害にともなう精神健康の悪化を予防するためには以下を提言する： 1) 頻回な転居を繰り返さない避難行動を計画する、2) できるだけ快適な生活空間を提供する、3) 特に恒久的住宅への転居予定のある女性に対し、注意を向け、効果的な支援につなげる必要がある。</p>	

## 学位論文審査結果報告書

平成 29 年 3 月 7 日

大学院医学研究科長 様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

### 【審査結果要旨】

氏 名 國分 直子

学位論文題名 Residence-related factors and psychological distress among evacuees after the Fukushima Daiichi nuclear power plant accident: a cross-sectional study

福島県においては、今般の東日本大震災後、数多くの住民が津波災害に加え、東京電力第一原子力発電所事故の故に県内外への避難を余儀なくされた。長期にわたって 10 万人を越す避難者が、仮設住居や借り上げ住居等への生活を続けたのである。本研究では仮設住居に避難している 525 名の住民に対し、半構造化された面接調査を行い、また Kessler 6-item Scale (K6) を用いた精神健康度に関する質問紙調査も併せて行った。対象者の平均年齢は 66.2 歳と高齢であり、女性が約 6 割を占めた。ロジスティック回帰分析の結果、頻回の転居（4 回以上）と住環境への不満足感が、K6 で抽出された心理的苦痛群との間に有意に関連があった。さらに性別によって層別解析を行ったところ、興味深いことに女性のみで永続的住居への転居の計画が心理的苦痛群と有意に関連があった(OR:1.93)。

本研究は、単なる質問紙郵送法を取らない訪問面接法を行ったことで 5 割を越す高い response rate を得ることができた。また結果に関しても、頻回の転居のみならず住環境への満足感が避難住民の心理的健康性に影響していることを明らかにした点は、仮設住居の構造的な重要性を改めて認識させたこととして意義深い。その一方、なぜ女性群で永続的住居への転居計画がメンタルヘルスの悪さと関連していたか、この逆説的結果について著者は仮設住居で培われた社会心理的絆が失われることへの不安をその一因と考察している。帰還する、あるいは帰還を考慮している住民が多いこの福島では、今回の研究で得られた知見は、地域精神保健上きわめて示唆に富むものである。よって、本論文は学位論文として相応しいものであると報告する。

論文審査委員 主査 前田正治  
副査 葛西龍樹  
副査 緑川早苗